

楽庵ニュース 第2号

2010年2月27日

発行元:NPO 法人茅ヶ崎ユニバーサルデザインスクエア
地域活動支援センター 楽庵
茅ヶ崎市浜竹3-4-64石黒ビル2F
TEL&FAX 0467-86-5898
ホームページ <http://park11.wakwak.com/~rakuan>
メールアドレス rakuan@aq.wakwak.com

*長楽萬年(古代文字):楽しいことの幾久しく限りないこと。

法人茅ヶ崎ユニバーサルデザインスクエア

地域活動支援センター楽庵の11年の活動を振り返る

茅ヶ崎市での地域活動支援センターの取組みを、充実したものにするのが急務であると職員一同気を引き締めて働いた一年でした。

センター楽庵では、パソコン学習、陶芸、そして手芸品等の基本的な作業活動事業の他、地域拠点事業、フレキシブル事業等を行っています。

今回は、地域拠点事業の一つである地域ネットワーク事業について、また楽庵が創設以来、力を注いできた生活相談・就労相談事業について紹介します。

地域ネットワーク事業

地域ネットワーク事業の目的は、委員会を構成して、地域との交流や作業活動拡大等について話し合い、情報交換することで、地域活支援センターとして自立することを目的としています。

委員会構成はNPO法人の理事やメンバーを中心に、茅ヶ崎市の行政関係者、地域の民生委員、町内会役員、主婦、事業主、医療関係者、教育関係者、障害者関係団体などの

幅広い人材で構成されています。

今年度は、委員会を6回開催する計画をたて、すでに5回開催しました。

地域活動支援センターの本来の目的を柱に、地域の人たちと共に事業を推進していくことを検討しました。

地域の人にはまず、週一回パソコン学習や陶芸の活動に参加して頂ける機会を設けることにしました。

生活相談・就労相談事業

茅ヶ崎市内外の専門機関と手をつないでメンバーのみなさんの生活の相談にのっています。

施設職員に求められる力は、問題発見能力、問題解決の発想、折衝調整能力、人間関係調整能力だといわれています。就労準備に必要な個人支援のあり方も検討しながら、現実にあった取り組みにしていきたいと思えます。就労した人たちにも気軽に立寄れる憩いの場を提供すると同時に、グループ活動や地域の人たちと交流できる場を提供していきたいと思えます。

ご意見やご感想を是非お寄せください。



湘南四季の花

蜜を求めてメジロがせつせと動いている
枝垂れ梅も咲き始め、春はもうすぐだ

常立寺 藤沢

おじいさんの脳の地図は書き換える



T B | 研究所所長 藤井正子さん

「脳のリハビリテーションのパラダイムシフト」と題して9月に、T B I研究所の藤井正子先生に講演いただきました。講演会にはリハビリテーションの専門家、臨床心理士や言語聴覚士や社会福祉士のほか、家族や楽庵に通所している当事者も熱心に受講しました。藤井先生は浜松医大の元教授で、現在は上野に研究所を持って、臨床研究をされています。

当日は、脳の「可塑性」に関しての新しい考え方の紹介がありました。脳の局所損傷後には中枢神経系の神経回路が新たな機能平衡状態に移行すると考えられますが、その脳内の機能代償を脳の可塑性といいます。

1970年代にマーゼニックが基礎研究や臨床応用から大人の脳も脳の可塑性がある」と今までの定説を覆した話をされました。

さらに、脳の地図を書き換えるマーゼニック実験の話や、Nudesらの猿の実験や、Taubらの訓練経過から、大人でのリハビリテーションを積極的に取り組む人の脳の地図が、リハビリテーションをやらぬ人に比べて、書き換えられる精度が高くなるという検証データを説明してくださいました。

また、臨界期前にある子どもたちの訓練プログラムも開発され、1996年の科学雑誌「Science」に掲載されました。そのプログラム教材は藤井先生の研究所にあり、楽庵でも適用を始めました。教材には、注意力や集中力を持続するための手立てがたくさん盛り込まれています。遂行能力、注意力、記憶力、言語などのリハビリテーション訓練の教材として活かしていきたいと思っています。



書籍 精神科セカンドオピニオンの配布

精神科薬物療法の適応には、第一に精神科的疾患の存在が確認された場合であり、第二には衝動性、多動性、強迫性、易興奮性などの脳機能障害の行動の偏りが対応によって改善されない場合です。単に行動を抑制するためではなく脳機能の改善をめざし、その結果として問題行動を軽減する目的で行うものです。

しかし現状は3分間診療で、診断も曖昧なまま、多剤投与、過沈静の医療がしばしば行われています。実際に問題があったとき、精神科医が必ずしも適切な診断や治療内容を提供しない場合があります、このような精神科医に掛かることで、病気が深刻になる場合があります。

今回、愛媛県の精神科医笠陽一郎先生が、実際に係わった患者さんと共に書いた書籍「精神科セカンドオピニオン」を財団法人日揮社会福祉財団から頂いた助成金を基に、県内外の関係者100名に配布しました。この書籍の読後の大きな反響があり、たくさんの方のハガキや手紙を頂きました。

内科医や精神科医からは、「医学は科学としては最も未熟な学問と言われていますが、その中でも精神科はとても科学とはいえないのが現状ではないでしょうか。客観性が乏しく、一人の主治医で治療法は大きく変わりますから、できる限り大勢の医師の意見を聞いて、治療方針を決定できれば理想的ですが、現実的ではありません。従ってセカンドオピニオンは最低限必要なことと思います。また「患者が声をあげる運動を起こす以外修復できないのではないか」という感



講演会

「あらたな出会いパート5」

—生きる力は何から生まれるか—

今年も、茅ヶ崎市文化会館で講演会を開催します。

基調講演は三吉クリニックの院長精神科医の三吉譲さんです。障害とは何かを考える取組みにしたいと考えています。発達障害という診断名で理解するのではなく、障害の何を理解することが大切なのかを話しあいます。

精神科の領域では、発達障害と思われる人が適応障害で多くの薬剤を処方されるという問題が顕在化しています。問題と思考されることは、実は生きるためにみんな抱える問題なのではないかと考えて、討議します。

新しく出版される「発達障害へのアプローチ」の執筆者のひとりである臨床発達心理士富沢佳代子さんが、こどもの特性や発達過程での親の関わりを「親の育ち・子の育ち」という演題で話します。

青年期に新体操の事故で身体障害になった磯部浩司さんと、吃音の苦しみから何度も自殺を考えたという岡秀幸さんに、自分のことばで人生の危機での苦悩や葛藤を語ってもらいます。日本発達障害学会で毎年発表している言語聴覚士崎原秀樹さんも話します。茅ヶ崎育ちの水季可奈さんが総合同会をします。

お問い合わせは楽庵まで

電話：0467・86・5898

日時：五月一日一時より

場所：茅ヶ崎市民会館小ホール

入場料：500円

個別支援計画への取り組み

アメリカでの幼児期からの情操教育に関してのモデルを5日間に亘り研修を受けました。本人の資質や能力を伸ばすためには、情緒面での関わりや、社会性を育てる視点が、大切だと考えています。教育訓練や職業前指導をする場合、その指導内容が目的に合っているのかの検討や、成果を確実なものにするためのデータのあり方についての指針を得ました。

世田谷区障害者就労支援センターでは独自の個別支援計画を作成し、実績を上げています。今後、茅ヶ崎でもその取り組みに生かしていきたいと思えます。

紹介

西伊豆の楽庵農園

友人の呉 慎次郎さん夫妻が下記のホームページで日頃の活動の様子を掲載しています。心のリハビリには、最適な素晴らしい農園です。

<http://rakurakunouen.hp.infoseek.co.jp>

想も頂きました。

長年、患者の立場で臨床を続けてこられた笠陽一郎先生は、今病床にいらつしやいますが、一日も早いご回復をお祈り申し上げます。

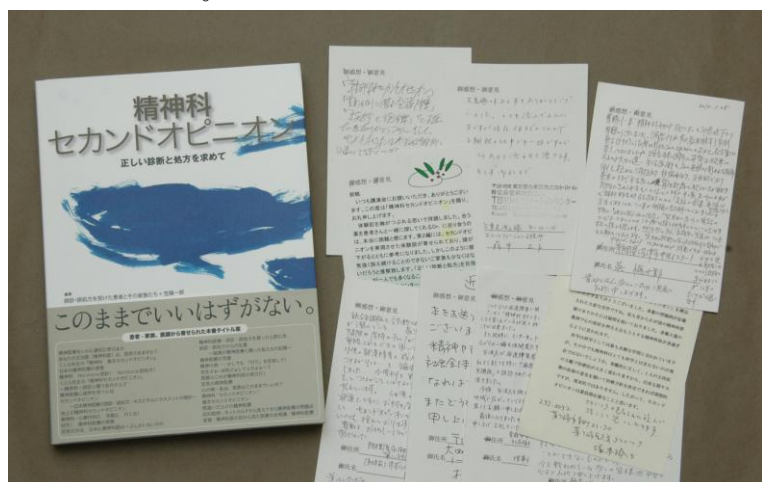
楽庵短信

現在、28名の人が利用者として登録をしています。

毎日、10名前後の人たちが通所して、パソコン学習や陶芸、手芸品作りを楽しんでいます。人に教えるくらい上達した人もいます。地域でのお祭りやバザーに模擬店を出して、自分たちの作品の販売もします。生活相談、就労相談も適宜行い、今回、県の障害者しごとサポーターの支援も受け、一名が就労できました。

編集後記

やつと楽庵ニュース2号を発行いたしました。今回も茂木春樹さんが写真を担当し、春を届けることができました。次回は、もっと楽庵の普段の生活を具体的にお知らせしたいと思っています。どうぞ感想をお寄せください。



この人

楽庵施設長 近藤 昭弘さん

福祉って何かな？ 関心を持ったき
っかけ

20年前まだ企業に勤務していた頃、茅ヶ崎徳洲会病院で高次脳機能障害のリハビリテーションをしていた妻と共に、言語障害の方の代償手段であるパソコンを使ったコミュニケーションボードのインターフェースの作成をしていました。その頃は、まだMS・DOSというOSの時代でパソコンは扱い難く、茅ヶ崎市在住のエンジニア仲間とパソコンクラブを作り、その操作の指導も始めました。

まだ福祉は救貧的で、何か一般市民には偽善的な印象がする頃でした。皆車いすを押すのはいやだけど、自分の力を生かしたいという仲間が自主的に集まって、病院の患者さんや養護学校の生徒にパソコン指導をしていました。

それぞれでみんなのためにできることはしようと



いう発想でした。桜の季節は花見をし、夏は茅ヶ崎海岸で花火を観ながらバーベキューをしたりするなかで、車いすの人たちも加わってパソコン通信をしながら「がんばらない」福祉を実践してきました。これが作業所楽庵の設立に繋がりました。

陶芸との出会い

若い頃茨城県に住んでいたこともあって、近くの笠間焼や益子焼には興味があり、よく遊びに出掛けていました。神奈川に戻り、陶芸を習いはじめたところに藤沢養護学校の美術の教諭の新出先生を紹介してもらった。新出先生は、どんな重度のこどもたちも簡単に陶芸を楽しめる自助具を手製で作っていました。釉薬のことから自助具の作り方、さらに陶芸の指導内容まで1年間教えて頂きました。単に陶芸作品を作るだけの技術ではなく、障害の特性に応じて主体的に参加できる方法を新出先生から学びました。これは楽庵の基盤にあるユニバーサルデザインの考え方に合うもので、早速楽庵でも自助具を作成しました。(下写真)

障害って？

どこの家庭にもさまざまな悩みや苦労があって、誰もが病気になってやがては年齢を重ねて身体が不自由になります。2歳で満州から引き揚げて両親は、藤原での「流れる星は生きていく」のような苦難を経験し、自分は育ちました。障害というときに目や耳や足の不自由さだけに注意がいつてしまう。不自由であっても決して不幸ではない人の障害だけを取り上げてしまふのは理不尽だと感じてきました。貧しさや病気などあったとしても、あきらめないで頑張らないで生きる知恵はあるはずだと思います。

障害がその人にどのように影響を与えているかを考えることが重要で、その人が知的な、精神的な、また身体的な問題を抱えていたとしても、人間に焦点をあてて、その心の底にある痛みや苦しみを感じていきたいと思っています。

ユニバーサルデザイン

誰もができる活動で、楽しく主体的に参加して安全な生活を目指して地域活動支援センターを運営したいと考えています。今はパソコンや陶芸を主な活動内容としていますが、個別の能力を生かした、趣味的なことから就労につながる活動まで多様な活動をさらに企画しています。現在茅ヶ崎の行谷にある畑をユニバーサル菜園が可能になるように整備しています。野菜や果物の栽培、イモ掘り、みかんの収穫だけではなく、料理をしたり、ネーチャークラフトなども考えています。みんなで何かを作りあげお互いに喜びを分かち合うことは大切です。障害のある人に何かをしてあげるのではなく、一緒に何かをする事で相互理解が生まれ、相手を思いやる気持ちや育つと感じています。地域のみなさんとも連携して、よりよい地域活動支援センターに育てていきたいと思っています。

